震動

発行人　金沢真宗学院
代表者　髙乗敬和
金沢市安江町15-52
金沢教務所内
電話　076-265-5191

第30号

慚愧

高岡英丞

「なぜ苦しいのか。なぜ困るのか。それは自分を失っているからです。自分を知らないから苦しみを免れることができないのです。そこに、自分を獲得する。ああ、迷うべくして迷っている。苦しむべくして苦しんでいる。そういう自分にうなずく。そういう自分を回復する。それが念仏申す意味なのです」。

これは平成七年七月、金沢教区教学研究室の講義として、室長の平野修先生が自坊明證寺の本堂でお話しされた一節である。そのときの課題は『愚禿鈔』下巻で、念仏の了解ということであったが、その講義は、闘病のなか、座薬で痛みを抑えながら、室員を自坊に招いての異例のものであった。そのころ私は、この真宗学院に関わりながら、教学研究室の室員でもあった。

さらにつづけて、

「そろそろ座薬が切れかかっています。少し痛みを感じます。この痛みとどう付き合っていくかと苦労します。夜も眠れない。そんな時、呼吸に合わせて南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏するのです。

これは呪文ということではありません。心の中では手に入らない未来を夢見たり、早く検査を受けていればとか、過ぎ去った過去を悔んでみたり、そういう思いがいろいろ悩ませます。要するに現在を失っているわけです。

そういうときに、呼吸に合わせて南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申していると、念仏せよ、念仏申せという仰せによって呼び出され引き出されてくるものがあるのです。失われていた自分自身が呼び出されてくるのです。痛いことは痛い。けれども少なくとも現在というものを手に入れるわけです。

清沢満之が、「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗託して、任運に法爾に、この現前の境遇に落在するもの、即ちこれなり」(『絶対他力の大道』)と言われる「現前の境遇」です。いまここにある自分自身。かけがえのない、一回きりの、いま現にある自分自身です。それ以外に何があるかと。そういうふうに、呼吸に合わせて南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏を実験しているわけです。これは意外と効くのです」。

(平成七年七月二四日)

平野先生は、その九月にお亡くなりになった。その年の『震動』第五号が追悼号となり、我々指導が分担して書き上げた。以来、どういう経緯であったか、私は毎号の『震動』に掲載するために、先生の、学院指導の研修会での「真宗の教育観」と題した講義録や、『教行信証』の特別講義(年六回で五年に渡った)を起こし、編集、校正するということを、この三十号のいまに至るまで続けてきた。もちろんご本人に確認や訂正、添削してもらうことはできない。これで本当にいいのだろうかという思いが付きまとう。ずいぶん無茶なことをしてきたものだが、先生は笑って許してくださるだろうと、勝手に思うことにした。

さてところで、それだけ続けてきたのなら、ずいぶん自分のためになったと思いたいのだが、時には何も変わらない自分がいることに気づき考え込む。学院に関わり、たくさんの学びの機会を与えられ、そして平野先生の言葉に繰り返し触れた三十年余りの月日が、いたずらに過ぎたのかと自問する。

すると声が聞こえた。「あなた、それは自分を知らないからです」と。

ああ、慚愧、慚愧・・・

真宗学院を卒業して

卒業生　山本　逸平

元々お寺にご縁の無い私が、転職や妻の実家に仏縁があった事など、不思議なご縁が重なって、この道を歩むことになり、やがて7年目になろうとしております。当初は僧侶になる事を、自分が悟りをひらいて賢者にでもなるつもりで臨んでいた様に思います。

真宗学院での講義や修練での学びを通じて、「聞く」「語る」「考える」事を教えて頂きました。とても単純な事だと思いましたが、非常に難しく今でも出来る事ではありません。人の話を素直に聞けず自分のものさしで受け止め、自分が良い人になるように話す、物事を自身に置き換えて考えず他人事だと受け止めるといった感じで、自身のあり様を知らされました。

これらの事を知る事が出来たのは、真宗学院で共に学んだ仲間やご指導いただいた講師の皆さま、修練での語り合った仲間やスタッフの皆さまとの出遭いによるもので、座談などを通じていつも主観的なものの見方をしている自分に気付かされ、仏の眼から見た自分を教えられたと思います。

卒業後も今までと変わらず仕事と法務の両立の生活が続き、忙しい日常に振り回される事になります。まさしく無明の闇の中で「雑毒の善」を行い続ける毎日になります。「人の為に」「門徒さんの為に」「家族の為に」と善い行いをしようとする中にも、見返りや自身の達成感の欲求など、自我に満ちている事を仏に照らして頂きながら、生かされている事に感謝して仏道を歩んでいきたいと思います。

最後になりますが、真宗学院卒業にあたり支えて下さった家族と寺族、真宗学院生の皆さん、スタッフの皆さんに心より感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

卒業生　相馬　佳子

真宗学院に入学しようと思ったのは、声明作法を学びたい、仏教について何も知らないので、知識を得たいと思ったからでした。

しかし、実際に授業を受けてみると、私の考えていたものとはずいぶん違いました。私の称える南無阿弥陀仏はただ口から声を出していただけということでした。親鸞聖人の言葉でも、その意味を理解するのではなく、言葉の背景にあるものを考えることが大切であると教えられました。単に目の前に見えることだけでなく、その言葉がなぜ発せられたのかを考えなければならないということでした。歴史の事実としてではなく、伝えられてきた重みを感じなければならなかったのです。私はただ年をとっただけで、何も考えずに、なんとなく生きてきて、もったいない時間を過ごしてしまったと思います。

それから、私は精神的に軟弱なので、人と接すると萎縮したり、緊張したりしてしまいます。自分ではコミュニケーションが苦手だと思っています。しかし、よくよく考えてみると、コミュニケーションが苦手というより、私は相手の話をきちんと聞いていたのだろうか、自分の思いばかりで相手の話を真剣に聞いていなかったのではないかと思うようになりました。学院での生活は私に自分を振り返ること、自分がどんな人間であったかを考えることの大切さを教えてくれました。これからは、日々の生活の中で出会った人、出会った言葉を大切にして日常生活を送っていきたいと思います。

卒業式集合写真(2022年3月25日)

キャンパスレポート

2年生　堀　水希

実は私は二度目の入学になります。二十歳の頃一度入学しましたが、通いきる事が出来ませんでした。しかしお寺の法務や月参りをする中でもう一度学びたいという気持ちが高まり、今年度入学させて頂きました。

小学生の息子が二人いる事もあり、母として大切で忙しい時間に学院に通う事に不安もあり、私がいない事で家族にも負担が増える事も申し訳なく思ったりと、心配ばかりしていました。しかし今は私にも、家族にも新しい世界が広がったように感じています。

学院の授業を通して自分の物事の見方が変わり始め、幅が広がった様に思いますし、四十歳を過ぎて新しく共に学ぶ仲間が出来た事もとても嬉しく思っています。一つの課題に対して話し合う場でも、自分とは違う視点をもっていたり、様々な考え方がある事に気づかされ、また「みんなちがってみんないい」という学院の雰囲気が自分の思いを素直に話せる場としてありがたく感じています。その様な学院で過ごせる事や、通学時間の一人になる時に「自分とは」と問う時間がもてるようになった事にも感謝しています。

入学する前は不安ばかりでしたが、一歩ふみ出してみると子ども達も私がいない事で自覚が出てきたのか、自分の事は自分で考えて出来るようにもなりました。私がいない事が良い影響を与える事もあるのだと、子ども達の成長に感心もしています。その事をあたり前と思わず、入学当時の気持ちを忘れず2年生も通いたいと思います。

仏になりたい私がいます。でもなれない私がいます。そのことにうなずきながら、気づかされながら、これからも歩んでいきたいと思います。

2年生　寺内　真

富山県の東端からの通学。十五時に家を出て二十二時過ぎに帰宅に、きついと感じつつも有意義な学びに、大変さも忘れることも多々ありました(さすがに交通費は大変でした)。

私が自坊の法務を手伝い始めた時、ある仏具屋さんから「お経を読む機械にならないでください」とアドバイスをいただきました。それは教えを説くことが少なく、門徒さんとの関わりも薄いお寺が増えてきていると感じるからということでした。自坊が所属する組の皆さんはそうしたことはなく、様々助けていただいているのですが、この言葉はいつも頭にあり、まずは門徒さんとの関りを大切にしようと日々過ごしていました。

学院ではお経などの意味や込められた想いなど、各先生方が学び、考えてこられたことを自らの言葉で教えていただきました。そして、こうした意味や想いなどを考えもせずにお勤めをしていたことに恥ずかしさがこみ上げてきました。門徒さんが私の読むお経をどんな気持ちで聞いていただいているのか、何を伝えたいのかを考えずにお経を読んでいた、心のない「機械」が読むようなお経になっていたことに気づかされました。そして、少しずつですがお経を読む時の気持ちが変わってきたように思います。

「お経を読む機械」という言葉は、仏具屋さんからのアドバイスだけでなく、私にとって僧侶は何を求められているのかを問う言葉に変化をしてきているように感じています。日々の門徒さんとの関わりでも話がかみ合わない、うまくいかないことが多くあります。学びが全然足りないだけでなく、自分のこととして考えていな

卒業式勤行

いこと、門徒さんの話をよく聞いていないことなどを学びの中で感じました。新しい一年が始まりますが、さらに学び、聞き、そして自らの考えや生き方を確かめる大切な時間にしていきたいと思います。

3年生　松村　和子

私は、金沢真宗学院に通い、ようやく三年目を迎えることができました。

その学びは、新型コロナウイルスの発症と共に、三密を避け、感染予防に留意しながらの日々。悲しいかな、先生や仲間との親睦を深めることもできないまま、最終学年を終えることになることでしょう。

そして、今もなお続くコロナ感染の拡大、その収束する兆しの見えない中、容赦なく発生する自然災害。また、冬の北京パラリンピックの最中に勃発したロシアのウクライナ軍事侵攻など、今後の行く末に不安が募るばかりです。

それは、時代を超え、国を超え、人種を超え、利害を超え、全人類の英知を結集して立向かわなければならい正念場。どんな未来を創造するのか、それぞれの国としての真価が問われています。

「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣（しんそうるいれつ）にして、未だ天眼を得ず、遠く観ることあたわず。」（『観経』）歴史の変遷、変わらぬ人間の業。

果たして、そこに救いはあるのでしょうか。いつの日か「真」に目覚める時を迎えられるのでしょか。

三年目の春。

私にとっても、「真」に出遇い、学びの真価が問われる時。

体力の衰え、思考力の不足を痛感しつつも、仲間と共に過ごす時間を喜びに変え、「今」を感謝しながら生きていきたいと思います。

最後に、自身に、仲間にエールを送ります。＊顔晴（がんば）れ＊

3年生　平田　史子

真宗学院に入学して2年がたちました。とにかく、通うことと授業を理解しようとする事に必死な日々でした。授業は聞いてもわからない。難しい。毎回その日の授業をわからないままにして終わってしまいました。この2年間を振り返っても自分は何を学ぶことができたのか正直わかりません。答えのない問題をずっと考え続けている2年間だったような気がします。

授業の中で、先生や学院生の意見を聞き座談をする事が度々ありました。私は簡潔に話をすることが苦手で結局何が言いたいのかわからなくなり話が終わる。なので話すことが嫌でした。でもいざ話すと、頷いて聞いてくれたり意見を言ってもらえたり、自分の言いたいことを全て話せたときは気持ちがすっきりした感じがして楽しかったです。そして、みんなの話を聞くと自分では思いつかないような考えを聞くことができ、もっといろんな話を聞きたいと思うようになりました。気持ちがわからない事もありますが、それより「こんな考え方があるのだ」と思う事が多く感じました。自分自身の日常生活でも考え方や人に対する接し方が変わり、視野が広がった気がします。人の話をちゃんと聞く。聞くことがすごく意味のある事で大事なことだと改めて気付くことができました。年齢や住んでいる環境がさまざまな人達が集まっている場だからこそ思う事でもあるのかなと思います。

3年生では、今までみたいにわからないまま終わってしまった、とならないように少しでも知識や経験を増やして、この先に繋がるように学んでいきたいと思います。

卒業式卒業証書授与

金沢真宗学院特別講義　開催報告

各分野で活躍されている先生方が、指導や学院性に向け、専門的な知識を踏まえて丁寧にお話しされます。

講義内容のほんの一端を紹介させていただきます。限られた文面では誤解や不都合を生じることがあるかと存じますが、学院卒業生をはじめ、皆様方に少しでも教えに触れていただきたく、このような形をもって紹介させていただきます。

2021年度　金沢真宗学院特別講義　開催一覧

開催日	講師		講題
2021年6月30日(水)	坂谷　学称	本廟部堂衆	荘厳について
2021年7月28日(水)	藤倉　善郎	ジャーナリスト	いま〝カルト問題〟をめぐって 何が起きているか
2021年9月16日(木)	木村　宣彰	大谷大学名誉教授 鈴木大拙館館長	鈴木大拙の人と思想 －大拙をどう学ぶか－
2021年10月21日(木)	清水　研	がん研究会有明病院 腫瘍精神科医師	がん患者とご家族の心のケア ～4000人と対話した 精神科医の経験から～
2021年10月26日(火)	名和　達宣	教学研究所所員	現代と親鸞教学 ～曽我量深没後五十年に際して～

荘厳について

坂谷　学称　氏

坂谷氏ははじめに、浄土真宗の御本尊は阿弥陀如来であるが、仏とははたらきであり、はたらきには姿、形、色もないと確認されたうえで、このはたらきを浄土の荘厳として表現しているのが、御内陣であると述べられ、荘厳とは誰の為にあるものなのかを問いかけられた。

このことを深めていくために、

凡そ真宗の本尊は、尽十方無碍光如来なり。かの本尊所居の浄土は究竟如虚空の土なり。ここをもって、祖師の『教行証』には、「仏はこれ不可思議光仏、土はまた無量光明土なり」

（聖典六八六頁）

と引用され、浄土とは場とか環境という認識になりがちであるが、仏というはたらきがなければ浄土は成り立たないと確認された。

そして、真宗道場の勤行声明は、もったいなくも「普く十方の衆生のために微妙の法を説く」（聖典四三頁）という仏の説法である。音声の中の「最も第一で微妙で和らかで優雅な」法の音である。（稟承餘艸第十五　勤行声明の事より）と引用され、当派の儀式とは仏が自己表現されている還相回向としてあると述べられた。

だからこそ

故聖人のおおせには、「親鸞は弟子一人ももたず」とこそ、おおせられ候いつれ。「そのゆえは、如来の教法を、十方衆生にとききかしむるときは、ただ如来の御代官をもうし

つるばかりなり。(聖典七六〇頁)

とあるように、阿弥陀様が我々に説いてくださっている教法を、「如来の御代官」となって、法要儀式が「勤まる」のだと心得ることが大切であると述べられた。

そして、毎日そのようにお荘厳をしっかりとし、向き合うことによって、

一切荘厳皆説法　無心領納自然知

「往生礼讃」

一切の荘厳は法を説き、心のうごきを用いずして自然に知ると、自分の在り方を思い知らされるということがあると述べられた。

最後に、荘厳、儀式とは聞法である。教義に基づいて、儀式をしっかり執行していくことが、法義相続になると締めくくられた。(小松　淳)

いま〝カルト問題〟をめぐって何が起きているか

藤倉　善郎 氏

カルト教団については、新聞やテレビのような馴染み深いメディアはほとんど報道しない。一体、今現在、カルト問題をめぐって何が起きているのだろうか。そういう問題提起から始まり、ひかりの輪代表の上祐氏のタレント化の問題、偽装勧誘の手法の変化、二世問題、カルト教団によるメディアへの牽制とメディア側の萎縮の問題など、カルト問題を「多岐にわたる現在進行中の社会問題」としてお話していただいた。

藤倉氏の講義の中で、私が特に印象に残ったポイントを一つ挙げてみたい。ある教団の教祖が集会で異様なコスプレ・派手なパフォーマンスをしている動画を、藤倉氏は私たちに見せられた。いかにもそれは私がイメージするカルト教団の教祖のふるまいそのものだった。その教祖のいかにもカルトっぽいが、誰の人格も誹謗中傷していないという点でそれはカルト問題ではないのだと藤倉氏は言われた。続いて、教祖が藤倉氏の霊を呼び出して教団職員にその霊を移して、その職員に傲慢な発言や態度を取らせたりするという演出をさせられている動画を見せられた。その演出は明らかに、藤倉氏をその教団を批判することによってただ有名になりたいだけの、教団にお金をせびるブラックジャーナリストに仕立て上げるための演出だった。その演出の中では教祖も職員も普通の服装をしているので、服装からすれば全然カルトっぽくないのだが、藤倉氏の人権侵害をしている点で、こちらこそカルト問題であると指摘された。

つまり、カルト問題かどうかを判断するポイントは何かというと、教義のおかしさや儀式の怪しさやコスプレやパフォーマンスの異様さではなく、そこに人権侵害があるかどうかである、と藤倉氏は指摘される。

その話とは少し違うが、私は講演を聞きながら、「言っていることではなく、やっていることがその人の正体」という、あるお寺の掲示板の言葉を思い出しもした。世界平和とか神さまの愛とか、いくら立派な教義を説いていても、やっていることが神や仏の名のもとに人権侵害を行っているなら、それはカルトだろうと。

たとえば私は、私個人の願い(欲望)に過ぎないのに、それを仏の願いなどと言って自分の欲望を絶対化・正当化していないだろうか。藤倉氏の講演を聞いて、自分の在り方が問われたような気がした。

(平野　喜之)

鈴木大拙の人と思想
ー大拙をどう学ぶかー

木村　宣彰 氏

「大拙とはどういう人だったのか、少しでも関心をもっていただき、皆さんにもっと調べてみようという思いになっていただければ……」という問題提起から講義は始まった。

先ず大拙の評価について、上田閑照(しずてる)、加藤周一、寺島実郎、西谷啓治の言葉を引用して話された。例えば、「東西異文化の『間』で、東西を含む広大な世界に生きた大拙は、禅や、念仏の妙好人のあり方に、世界に新しい息吹を吹き込む創造的自由、霊性的自覚を見出した」(上田閑照)とあるように、いずれもわれわれ日本人に対して、「世界人としての日本人」の自覚を促した人として評価されている。

次に年譜をもとに大拙の生涯について語られた。明治八年(一八七五)に金沢市本多町に生まれ、第四高等学校を経て、能登飯田小学校高等

科の英語教師（十九歳）、その翌年、美川小学校高等科訓導となったことなどに触れられ、その後、鎌倉円覚寺の今北洪川に参禅した（二十一歳）ことを、さまざまなエピソードを交えながら話された。また妻であるビアトリス・レーンへの思いを菩薩思想との絡みから語られ、その後、佐々木月樵の招聘と西田幾多郎の勧めで真宗大谷大学教授（五十一歳）となり、山辺習学、赤沼智善などと共に「東方仏教徒協会」の設立、『イースタン・ブッディスト』の創刊について注目されたのである。

大拙の思想については、大まかに云えば、東洋と西洋の考え方を踏まえながら、西洋の思想の不備を補足するものである。西洋は物事を二つに分けて考えるのに対して、東洋は二分する大元から考えはじめるという。氏は、そのような東洋の思想について、大拙の根幹に流れている禅・念仏の視点を通して解説された。さらには、大拙が西洋の人々に東洋の思想を伝えた功績について、単に口で説明するのではなく、具体的な生活の中からにじみ出る大拙の人柄についても触れられ、大拙自身が仏教の思想に生きている、まさしく「得道の人」であることに言及されたのである。

「鈴木大拙館長」という立場である氏は、当初、金沢市から「記念館」をつくろうという話に対して、それでは遺品・遺物をならべて過去の人になってしまう、そうではなく大拙は仏教の思想家であることから、過去の人ではなく今も生きているという意味をもった、「鈴木大拙館」にしたという裏話をしていただいた。まさしく「大拙とはどういう人だったのか、そして何を目指しているのか」、そんな問題点にもとづいて、今も大拙を仰ぎ、ともに生きておられる氏自身の姿がにじみ出る講義であった。　（大窪　康充）

がん患者とご家族の心のケア
～4000人と対話した精神科医の経験から～
清水　研氏

腫瘍精神科とは、がん患者を専門とする精神科のことであり、清水先生はこれまで4000人を超えるがん患者と対話されてきました。

がんを患うことによって、健康に担保された諸能力を失い、未来が閉ざされ、これまでの世界観・人生観が崩れてしまったがん患者は、生きる意味を見失う事態に陥ってしまいます。講義の中、清水先生はそのようながん患者にとって大切なことは、悲しむことであると説明されました。たとえどんなに受け入れがたい状況になったとしても、人には本来、新たな現実に向き合っていける力が備わっており、その時に悲しむこととは、次に進むためにとても重要な感情であると言います。がん体験後の悲しみの感情を経験する時期、そして病気になったことの意味を考える時期、それらを経てはじめて、これまでとは違った新たないのちの意味の世界が開かれていく。腫瘍精神科としてがんに苦しむ人々に寄り添う先生が日々なされているお仕事とは、がんによって喪失したものに対してきちんと悲しむための場を提供することと、その人が自分の抱える苦悩をしっかり理解するために対話することであることを教わりました。

講義において特に印象深かったことは、がん患者との対話で先生自身が変わっていったということでした。国立がんセンターで働き始めた頃は、精神科医として学んできたことがほとんど役に立たないということを連日体験されたそうです。患者さんからの「もう先が長くない。いったいどうしたらよいのか」、「残りのわずかな時間をどう生きてよいのか」という問いに、全く答えることができず、むしろそのように投げかけられた問いによって、先生自身が「自分は何のために生きるのか」という問題に向き合わざるを得なくなりました。がん患者との対話を通して、死ということを意識し、人生は有限であるという事実に立ち返る。そして、人生の根本的な課題に向き合うようになったと語る先生の言葉は、我々にとっても大きな意味を持っているのではないかと感じました。　（平野　慶之）

現代と親鸞教学
～曽我量深没後五十年に際して～

名和　達宣 氏

名和氏の話の中で私が印象に残ったことを二点挙げたい。一つは、名和氏が「教学」を課題として歩んできた根本の動機は、大谷派宗門（寺院）の中で生きることを通して感じてきた息苦しさや違和感にあったということだ。その息苦しさや違和感の原因を名和氏はついに自分の言葉で言い当てることができた。それは、「世界観」に先立つ「価値観」の付与（押し付け）ということである。親鸞聖人という方はこういうことを説き、こういう生き方をした人だ、その親鸞の生き方と言葉にうたれたから私は親鸞を宗祖として生きていきたい、また親鸞の教えを門徒さんと共に聞く場として開かれているお寺を継ぎたいというのが、「世界観」に基づく「価値観」の選びだとすると、その逆、つまり「お前はお寺を継ぐために生まれてきたんだぞ」と本人の世界観や意志や選びを最初から問題にせず、「お寺を継ぐことは価値のあることだ」と父親の価値観を押し付けられたこと、それを名和氏は「世界観」に先立つ「価値観」の付与（押し付け）と言われた。この話はそれを聞いていた学院生の中には、自分の身に起こったことだと感じる方もおられたのではないだろうか。

それから二点目として、講義の資料の最後のほうに掲載されている、名和氏の次の言葉を紹介したい。

「現代において曽我の言説と対峙する時、その上澄みだけでなく、いかなる濁流に身を浸していたかにも目を向けなければならない。我々もまた、時代の流れのうちに在るという痛みを感じつつ」

名和氏自身が講義の中でこの自分の文章に触れ、「これが、曽我量深師の没後五十年に際して、特に戦時中の問題を通して現代における我われ自身の問題を考える上で、外してはならない視座なのではないかなというふうに思います」と言われたことが印象に残っている。

時代に相応せんとした教学的な営みが「五濁悪世に迎合した教学」になってしまうということがあるが、曽我先生もまた決してその難を逃れることはできなかった。現代を生きる私たちもまた、その難から逃れることは決して容易ではない。いつでも時代の濁流に飲み込まれてしまう可能性がある我われだからこそ、曽我先生の戦時中の姿から目を逸らさずにしっかり学び、私たちのこれからの歩みにしていきたいものである。

（平野　喜之）

二〇二二年度 真宗学院一日研修会

コロナ下の影響により、今年度は、オンラインによる開催となりました（参加者五十数名）。はじめての試みとして、各学年一人ずつ、「私にとっての真宗の学びについて」と題してお話をいただき（二十分程度）、その内容について、各々指導が一言コメントする（十分程度）という形式で進めました。その内容のほんの一部を紹介します。

一日研修会

一年生　今湊　珠理

これまでの学びは、真宗の教えを知識として覚え、それを他者に教えてあげようとするためのものでした。自分で当然と思っていたことに対して、何も疑おうとしなかったことが恥ずかしかったです。そんな自分を受け止めることは簡単なことではありませんが、仏道に立ち止まって考えることから、一歩、踏み出そうと思いました。

指導　田中　義大

「どのようにしたら？（ｈｏｗ　ｔｏ…）」から始まることが間違いであった、その気づきは大事なことだと思います。そんな気づきがあったからこそ、今につながっているのでしょう。

「私にとって」という、自分を抜きにしない学びが求められているのではないでしょうか。自分の生き方を問うていくことが宗教心であり、問いに立たなければ、歩みが止まってしまうことになります。

二年生　石黒　宇祥

お寺の後継として、ただ経典をうまく読めればいいと思っていました。授業の中味の理解は、ままならないまま一年が過ぎたようです。ただ、真宗を考える機会になったのは前期修練でした。差別問題の講義の中で、「（僧侶方は）何も考えずに南無阿弥陀仏と、ただ歌をうたっているようにしか聞こえない」（米田　富）と言われ、私自身、本当にそうだと思いました。もし私が今、ご門徒から「なぜ念仏を称えるのか？」と聞かれたら、何も言い返せません。本山の阿弥陀堂で一番前に座ったとき、阿弥陀如来像が大きくて、いつも自分のことばかり考えていたことを見抜かれたようでした。

指導　谷　涼雅

修練で学んだことが、なぜ自分の課題になったのか、それをテーマにして考えてみたらどうでしょうか。差別問題やハンセン病の問題など、さまざまな学びの中で、あなたが知ってしまった以上、そこから逃げられませんね。修練を通して、共に学ぶことの大切さを再確認したのではないでしょうか。

三年生聴講生　桶谷　忠司

聴講生としてですが、他宗教の自分を受け入れてくれたことに感謝します。自らの生い立ちを振り返り、ある事がきっかけとなって、死と向き合わざるを得なくなりました。その時、自分が求めていたものは、お寺にはなかったのです。あるご縁で、牧師となりましたが、この度、真宗の教えを学ぶ上で、キリスト教の思想と共感できるところが多々ありました。牧師である私が、真宗を学ぶ意味を考え続けていくことになったのです。それは、常に自分の死、人の死を問い続けるための学びであり、短い人生の中で、生きる意味、喜び、感謝を与えてくれるのは、まさしく宗教だからだと思います。

指導　髙岡　英丞

真宗の学びは、求めるものがなければ成り立ちません。ただ、答えは聞いています。それは南無阿弥陀仏ということです。ではどういうことでしょうか？　繰り返し聞いてもわかりません。一生聞き続けなければなりません。そこには背中を押してくれるもの、引っ張ってくれる人がいるはずです。私の指導である平野修先生の言葉を紹介します……。

総　括

時代の流れとともに、真宗の教えが伝わりにくくなったように思います。それは同時に、私たち僧侶が、真を宗とする生き方がどのようなことなのか、わかりづらくなっていることと重なってくるようです。現代人の宗教、ことに念仏に対する受け止め方が変容するなかで、お寺や僧侶に対する見方が厳しくなればなるほど、私たち一人ひとりの、真を宗とする生き方が問われてくることをこの研修会で確かめさせていただきました。

（大窪　康充）

『教行信証』入門⑥

人間独立の仏道

平野　修

今年度最後の『教行信証』の講義です。先回「真仏土巻」を取り上げました。少しその点に触れて、今回の「方便化身土巻」に入りたいと思います。

『阿弥陀経』を見ると「功徳」という言葉がたくさん出てきます。あるいは「功徳荘厳」という言葉も出てきます。また我々は勤行の結びで「願以此功徳」と申しています。この功徳が、浄土ということと深く関係していると言わなければなりません。

この「功徳」という言葉のもともとの意味は、そのものの持つ優れた性質、あるいは可能性という意味になります。身近なことで例えますと、お金というものが功徳という意味を表します。お金があればいろいろなものが手に入る可能性があります。お金がそういう優れた性質、可能性を持つということで、お金は功徳のあるものとなります。

いまひとつ身近なことで、健康というものです。健康であるということはいろいろなことができるという可能性がある。健康であるということが、とても優れた性質と可能性を持つわけです。我々が健康に深い関心をよせるのは、健康であることが功徳を持っているからということになります。

三番目は知識、ものを知っているということ。このことが優れた性質を持っています。知識があるということは、いろいろな可能性を持つ。もう一つの功徳のあるお金まで呼び込む可能性を持っているというように、知識が、功徳のあるものと考えられます。

そうすると、現代の三種の功徳は、お金と健康と知識。この三つを持っていれば現代人はその優れた性質と可能性によって満足を得ることができる。功徳とはそういう意味で我々の社会や生活にとても関係していることなのです。

そういう功徳に対して、『阿弥陀経』で出てくる功徳というのは、何について言われたものであるかというと、これは仏陀ということです。仏陀、あるいは仏陀の証りということに優れた性質、可能性というものがあると。そしてその優れた性質、可能性を具体的な形として表現することが「荘厳」ということになります。

『阿弥陀経』に「功徳荘厳」と繰り返されるのは、仏陀あるいは仏陀の証りということが、優れた性質、可能性を持っている。それを我々に知らせるために具体的なことで表現する。荘厳する。なぜそのようなことをするのかというと、我々に仏陀および仏陀の証りということを知らせるためである。仏陀ということを我々に知らせるために、『阿弥陀経』に「功徳荘厳」ということが出てくると。

ところで『阿弥陀経』に説かれている功徳は、三種功徳と言われます。三種類の形をもって仏陀という功徳を表す。その第一が国土荘厳。二番目が仏荘厳。そして三番目が菩薩荘厳。『阿弥陀経』はそういうふうになっています。

最初に浄土の様子が説かれています。浄土が荘厳されるわけです。つぎに阿弥陀仏ということが荘厳されてきます。そしてその世界に住む衆生、つまり菩薩のことが表されるということで、三種荘厳がなされています。

なぜこのようなことが問題になるかというと、やはり功徳ということが問題になるわけです。優れた性質、可能性ということなら我々のところにも、お金とか、健康、知識というものがあると。これだけで話が済むなら、別に仏教の功徳を持ち出す必要はない。けれども仏教はこの世の三種の功徳にまさるという意味がある。なぜ仏教を聞くのか。それは世にある功徳より優れた性質を仏教は持っているからだと。

これは曇鸞大師の『浄土論註』に出てくる言葉（聖典一七〇頁）ですが、功徳ということには「不実の功徳」と「真実の功徳」がある。この世の中の功徳は不実の功徳と言わなければならない。そして仏教が表そうとした功徳は、不実に対して真実の功徳と言わなければならないと。

この世の中のものがなぜ不実の功徳になるかというと、それは条件付きの功徳だからということになります。例えばおなかが減っているときに、お金がどれだけあっても食べ物がなければ何の功徳も発揮できません。お金の功徳は物があるときに優れた性質を発揮するわけです。つまり条件付きでの功徳です。あるいはお金があれば幸せかというと、お金が人間を駄目にしたり、世の中

を混乱させるということもあります。

健康ということも条件付きです。いろいろな条件が整って健康である。ですから健康は、たまたま健康であると言うのが真相です。知識ということも必ずしも喜ぶべき功徳をもたらすわけではありません。今日の状況がそれをよく物語っている。知識が、環境の問題や人間の問題を引き起こす。すると人間を、あるいは自分自身を失うということも結果してくる。

そういう点でこの三つの功徳は不実であり、不実であるがゆえに限界を持ち、自分自身を明らかにしないという面を持っている。そういうことに対して真実の功徳ということが取り上げられてきたわけです。

この真実功徳について親鸞聖人は、その『尊号真像銘文』で「真実功徳は誓願の尊号なり」（聖典五一八頁）、すなわち南無阿弥陀仏という本願の名号が真実功徳を表すという理解を示されます。つまり仏陀の名が真実功徳を表しているのだと。その功徳を三種に表して、まず国土荘厳、国土という意味で真実の功徳が表現されたわけです。

『浄土論』を見ますと国土荘厳の第一番目に「観彼世界相　勝過三界道」と、三界を勝過するという功徳だと示されます。これは「清浄功徳」と言われます。この場合の清浄というのは出世間という意味を表します。我々のところは世間です。その世間で言う三つの功徳を中心にして出来上がっている世界です。いま仏陀ということの優れた性質とは、我々の知っている世界を超えた世界があるということで、最初に出世間という意味があるのだと示される。

『浄土論』は清浄功徳に続いて、「量功徳」、「性功徳」、「形相功徳」と、国土について十七の功徳を挙げています。いくつか触れてみますと、大地、地面が持っている優れた性質、功徳というのは、一切のいのちを出生させるという優れた性質を持っている。これが「清浄功徳」。さらに重いものであろうと軽いものであろうと分け隔てることがない広大さという性質をもっている。これが「量功徳」。そして三番目の「性功徳」で、浄土は愛情、慈悲というものがもとになってできているというふうに順序だてて、十七の国土の優れた性質というものを表します。

親鸞聖人で言えば、南無阿弥陀仏という仏陀の名号が、そういう優れた性質を表している。それをいま国土ということで表す。ですから我々が仏陀ということにわずかでも触れることができるなら、自分自身のうえにそういう国土が持つ功徳を知ることができるようなるということです。

いま教区では「同一に念仏して別の道なきがゆえに」というテーマが掲げられています。これは『浄土論註』下巻の「眷属功徳」を釈したところで、

同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷属無量なり。いずくんぞ思議すべきや。

（聖典二八二頁）

とあるところですが、この「同一念仏無別道故」というのも国土が持っている優れた性質です。十七種の国土の功徳のひとつに、「眷属功徳」という優れた性質があると。「眷属」とは、振り向いてすぐそばに見つけることのできる親しい間柄を眷属と言います。

我々にも六親眷属という言葉がありますが、その場合、我々の言う眷属というものの土台は血です。血を同じくしているという感覚です。ですからこの場合、血が大地になります。ここから先祖という考え方が出てきます。

宗門が「家の宗教より個の自覚の宗教へ」と掲げましたが、この家ということの本体、背景が血ということになります。けれども血での繋がりを言い出すと、血で繋がっていないものははずれます。すると血を大地としても眷属ということは成り立つけれども、閉じられた方向を持ちます。非常に狭い国土になります。他のものは入ることができない、乗ることのできない基礎ですから。

いま国土の功徳の中の「眷属功徳」ということは、親鸞聖人は『教行信証』の「行巻」で、釈尊から始まり法然に至るまでの三国の方々の著作が引かれたところで、まとめられて「念仏成仏すべし」（聖典一八九頁）と言われて、その次にこの『論註』の「眷属功徳」の文を引かれます。

親鸞聖人が「行巻」で、特に七高僧に代表させて何を表したのかというと歴史です。人間の歴史です。その歴史とは家とか血という閉じられた歴史観と違って、開かれた歴史観というものが念仏の意味になってくるかと思うのです。

人間であり得るということ、そしてともに人間であるということを認め得ることのできる基礎になるものが、念仏ということの持っている功徳だと。そういう意味で国土のなかに眷属功徳という意味があるのだと。浄土の真宗というのは、我々に開かれた歴史観を与えるという意味があ

ると考えることができます。「真仏土巻」についてはここまでとします。

『教行信証』のなかで唯一、本・末両巻になっているものが「方便化身土巻」である。しかも「信巻」にあるような問答がなされている。また正像末の三時観も取り上げられている。その意味ではたいへん内容が豊富であるが、それだけにこの巻の意図を知ることは難解である。

㋐「方便化身土」はなぜ、どのようにして生まれてきたのか。

㋑本巻の構成とその意味について。

「方便化身土巻」に触れていきます。この方便というのは、前五巻の顕浄土真実という真実ということに対して方便の巻ということですが、ここには親鸞聖人の仏教についての見方、仏教史観ということがあります。

仏教は日本に八宗、八つの宗として伝わってきます。いろいろな宗旨がある。そんな中に法然上人が言われた浄土宗は、他の宗とどういう関係になっているのかというと、法然上人の浄土宗を宣言されたことが、他の宗旨の人たちにとっては許すことのできないこととして目に写っていきます。具体的には法然を糾弾するという形となって現れます。

法然上人の浄土宗と、他の仏教の宗旨とはどういう関係になっているのかということについて、他の宗旨は念仏ということに至るために説かれたのであって、念仏が明らかになったから、もう他の宗の役目は済んだという言い方で、「廃立」という言い方を法然上人はなさいます。

このことについて親鸞聖人は、役目が済んだということは、もう不要だという意味ではない。法然上人が廃立ということで言おうとされたのは、「方便」という意味であって、念仏の教えに転ずべくあるところの教えである。仏教はこの世この身に仏の証りを開くことが目標であるかのように伝わってきたけれども、それは往生浄土ということに至るために、仮に方便として説かれたものであると、一代の仏教を真実と方便というふうに了解されたわけです。

これは非常に大胆不適なわけです。お釈迦様がいろいろ説かれたことは、念仏の教えに帰すために説いたのだと、お釈迦様に代わって発言するのですから。そういうところから真実と方便という問題、他の仏教理解と念仏との関係ということが取り上げられた。これが方便ということの持つ意味になります。

しかし「方便化身土巻」が取り上げられてきた理由は、それほど単純なことではありません。それはその始まりの言葉にあります。

> しかるに濁世の群萌、穢悪の含識、いまし九十五種の邪道を出でて、半満・権実の法門に入るいえども、真なる者は、はなはだもって難く、実なる者は、はなはだもって希なり。偽なる者は、はなはだもって多く、虚なる者は、はなはだもって滋し。　（聖典三二六頁）

これが親鸞聖人の問題意識です。世間で言われる思想や、様々な宗教を離れて仏教に帰依したと。具体的には、八宗と言われる当時の比叡山や奈良、高野山の仏教です。そしてその様子を見ると、仏教に関わって出世間ということが知られているかというと、いよいよ世間のことに振り回されている様子が見られる。すがすがしく証りということを喜んでいるものはめったに見られない。つまり仏教に関わるけれども、結果は仏教でないような姿をとっている。それはなぜかと。

これは今日の我々も同じです。仏教に関わったのだから何かこれまでと違ったものが出てきそうなのに、なぜか仏教と関わっていないものとあまり変わらないし、関わらない人より何か理屈のようなものが増えてこざかしくなったとしか思えない。なぜそんなことになるのかということです。

この「方便化身土巻」は、本巻と末巻の二巻に分かれていて、その本巻は特に十九の願と二十の願というものを中心に展開していきます。そして親鸞聖人の理解によれば、十九願を表しているのが『観経』であり、二十願をよく表している経典が『阿弥陀経』である。その二つの経典を中心として、仏教に関わりながら仏教でなくなっていく理由を尋ねていかれます。

すこしだけ触れておきますと、このことについて考えていくうえで親鸞聖人が出される言葉が、「竪」と「横」という言葉です。竪という字は変化を表します。横は変化がないことを表します。

この竪はどこまで変化するかというと、凡夫が仏陀というところまで竪に変化していく。凡夫が仏教を学んで声聞という位になり、阿羅漢とな

りさらに修行して仏陀となる。これが阿含の時代の竪の道。これが大乗の仏教になると、凡夫が修行し菩薩になり、その菩薩が五十二の段階を経て仏になる。つまり阿含でも大乗においても仏教と言えば凡夫が変化して仏になるわけです。

ですから当然、仏教は出家者を中心として考えられます。そうすると在家のものはどうなるのかというと、在家は無関係になります。日本に仏教は入ってきましたが、以来、長い間それは出家者の道だったわけです。

そういう事情の中で、法然上人が在家、一般庶民と関わったわけです。一般庶民というのは親鸞聖人の手紙が伝えているように、「ものもおぼえぬあさましき人々」(聖典六〇三頁)です。読み書きができないということは、それだけでなくものの道理が分からない、地を這うようにして生きることに追いまくられていた人たちです。追いまくられるように生活しているのだから何年生きようが、何年過ぎようが変わらない。文字どおり横です。

そこに法然上人が、そういう者たちの上にも仏の証りというものは輝くということを表した言葉が「往生」ということだったわけです。竪、横のことで言えば「横超」という言葉になります。この横超ということは、弥陀の本願の教えです。弥陀の本願ということがあって初めて横超ということが成り立ちます。

何十年来、仏法を聞いてきたけれど、何も変わりませんという場合、ふつうは変わらないのは駄目だと思うのは、竪こそ本当だという考え方が支配的だからです。変わっていくのが正しい、本当だと。では竪ができるのかというと、できないという問題を取り上げたのが『観経』だったのです。『観経』でどういう形で取り上げたかというと「来迎」という考え方でした。お迎えに来てもらうという考え方。この臨終来迎ということが十九願に出て来るわけです。

なぜ竪の道が徹底しえないのかという問題ですが、その理由の一つが、正像末という考え方。お釈迦様から時間が遠く隔たっている時代だということで、末法ということが竪の道を困難にしている。これがかなりの説得力を持ったわけです。高くにまで上がれないのは末法という事情によると。

それでどう考えたかというと、一度お迎えいただいて、そして整った環境のところで修行し直して高みに上がろうというふうに往生浄土を考えるということも出てきます。親鸞聖人はこの考え方を十九願を取り上げるなかで問題とされます。

ところが親鸞聖人は、善導大師をとおして、高みに上がれない理由は時代のせいでもなければ、我々の能力が劣っているためでもないのだという、その理由を見出したわけです。その理由とは「化身土巻」では、「仏智疑惑」ということが一番もとにあるのだと。仏ということを疑っている。仏のことを知らない。仏の智慧というものを見くびっている。

それは逆に言えば、仏の智慧を信ずるということは、どれだけ聞いても、いくら努力しても変わらないということが何の障害にもならないあり方を我々に開く。つまり横超という意味が出てきたわけです。「方便化身土巻」の本巻は、こういう意味を明らかにするために展開するわけです。

最後に、末巻について少しだけ触れます。末巻は、『涅槃経』の、

仏に帰依せば、終にまたその余の諸天神に帰依せざれ　(聖典三六八頁)

という引文から始まっています。

末巻の問題は、仏に帰依するということがどのような意味を持つのか。ここがはっきりしないなら、どうしても余の諸天神に帰依せざるを得ないという問題が残ると。その、仏に帰依することがはっきりしない場合に生じてくるさまざまな問題を取り上げられます。

そして末巻はその最後を、儒教の経書と言われる『論語』を読み替えて結ばれます。

季路問わく、「鬼神に事えんか」と。子の曰わく、「事うることあたわず。ひといずくんぞ能く鬼神に事えんや」と。　(聖典三九八頁)

この『論語』の文は、親鸞聖人独自の読み替えなのですが、人間が独立するという、そういう意味の言葉をもって『教行信証』は終わっています。つまり仏に帰依するということは、そこに人としての独立がある。ですから念仏の教えによって、人間は独立することができる。これが『教行信証』全体で言おうとされてきたことかと思うのです。

(平成五年度　第六回講義)

平成六年一月二十一日

本の紹介

①仏教のミカタ
―仏教から現代を考える31のテーマ

定価　935円(税込)

「コロナ」「多様性」「経済」「AI」など…、様々な社会問題や人生の悩み、日々の暮らしの中にある出来事から31のキーワードを抽出し、〝仏教のミカタ（見方）から考えてみると?〟を提起する一冊。31名の著者が執筆し、各文章の末尾にはブッダや親鸞聖人の言葉を「法語」として紹介。

②慶喜奉讃に起つ

著者　池田勇諦、楠信生、金子大榮　他

定価　275円(税込)

〝親鸞聖人のご誕生を喜ぶということの根底には、何はともあれ、わが身の誕生が受け取れるか受け取れないかということが、問われているのです〟（池田勇諦氏）私たちにとって、二〇二三年にお迎えする宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要とは―。その意義を問い尋ねる一冊。

③解読教行信証 下巻

著者　教学研究所

定価　4、180円(税込)

宗祖の主著『教行信証』の内、「真仏土巻」「化身土巻」の現代語訳。『真宗聖典』所収の『教行信証』に基づいた書き下し文を上段、その現代語訳を下段に構成し、書き下し文中の難解な用語を簡単に説明した脚注、さらに詳しい説明を要する用語は巻末に語註を掲載。また巻末には訳注、索引も掲載。

④浄土真宗とは何か
―『教行信証』のこころ―

著者　金子大榮

定価　825円(税込)

「真宗とはどのような教えですか?この素朴な問いに、仏法の聞思と伝道に生涯を尽くした学僧はどう応えるのか…?〟初めて真宗にふれる人にもわかるように〟という願いのもと、近代真宗教学の礎を築いたひとり　金子大榮氏が、親鸞聖人の主著『教行信証』の要所の意訳をまじえつつ、明快に語った一冊。

編集後記

『震動』三十号をお届けします。巻頭言を執筆された高岡指導におかれましては、長きにわたり、平野修先生の講義録を掲載して下さいました。巻頭言の内容からもわかるように、平野先生は命がけで私たちに声をかけ、そして仏法を伝えていく場を大切にして下さったのだと思います。

この学院は、声をかけ合うことによって仏法が伝わっていく場だと思います。しかし、感染予防策から、以前とは違った授業風景があります。広い部屋の中でもマスクごしの顔しかありません。戸惑います。またオンライン授業の経験をしました。何か日程をこなすだけの感覚でした。

繰り返しになりますが、当学院は、指導を含めて、一人ひとりが集い、共に学び、悩み、声をかけ合うことによって深い関係が生まれ、そして仏法が伝わっていく場です。

ここ数年、私自身が、コロナ下の状況のせいにして、学院生の皆さんに声をかけていたのかどうか、やはり怠っていたことを申し訳なく残念でなりません。ことに三年生の皆さんには、「三年間、お疲れ様でした。これからも一緒にがんばっていきましょう」と、この場を通して声をかけさせて下さい。

新年度が始まります。学院生の皆さんには、多くの声をかけていきたいと思います。

（安倍　渉）